

富田林市遺跡調査報告23

西板持遺跡Ⅰ

『(仮称)西板持コミュニティ施設兼老人いこいの家』建設に伴う調査

2003・3

富田林市遺跡調査会

富田林市遺跡調査会報告23 西板持遺跡 I 正誤表

項	行	誤	正
3	7	富田林教育委員会（編）	富田林 <u>市</u> 教育委員会（編）
11	13	明確な稜線が稜線で	明確な <u>稜線</u> で
16	3	高杯 8	高杯 <u>3</u>

はじめに

高齢化社会が進む昨今、お年寄りがいかに老後を有益に生きていけるかが現在の日本が抱えている大きな問題といえます。今回の西板持遺跡発掘調査のきっかけとなった『(仮称)西板持コミュニティセンター兼老人憩いの家』は、地元市民自らがその豊かな老後生活の活動拠点として計画したものです。有効に活用して行かれることを心から願っております。

その一方で、土地開発は多くの貴重な遺跡を破壊していくことも事実です。この度の調査では、古墳時代中期中頃から後期前半（約1500年前）の集落遺跡が発見されました。古墳時代の平地部での遺跡の発見は本市でも非常に珍しく、重要な歴史資料であります。わたくしたちは、写真や図面などの記録としてこのような資料を保存していくわけですが、市民の皆様にも遺跡をどのように保存していくかという問題に目を向けて頂けたらと考えています。

本書は、その西板持遺跡の発掘調査成果を収録したものです。埋蔵文化財へのご理解を深めていただくために活用していただければ幸いに思います。

最後になりましたが、調査に際しましては地元住民の方々には多大なご厚意を承りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。また暖かいご指導を頂いた関係者各位にも合わせて厚く御礼申し上げます。今後とも、本市文化財への一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成15年3月

富田林市遺跡調査会

教育長 清水 富夫

例 言

1. 本書は『(仮称) 西板持コミュニティ施設兼老人いこいの家』の建設にともない富田林市遺跡調査会が平成14年度に緊急発掘調査を行った西板持遺跡の調査概要である。
2. 調査は横山成己が担当し、現地調査は平成14年8月19日に着手し、同年9月6日に終了した。
3. 現地調査にあたっては瀬戸直子の協力を得た。また内業調査にあたっては栗田薫、金行美智子、楠木理恵、瀬戸直子、中野咲、前野美智子、山本節子の協力を得た。
4. 現地写真撮影は横山成己が、遺構実測は瀬戸直子、横山成己が、遺物実測・拓本は金行美智子、中野咲、横山成己が、遺物写真撮影は横山成己が、製図は金行美智子、横山成己が行った。
5. 本書の執筆および編集は横山成己が行った。
6. 本書で使用した方位は磁北を表示し、標高は東京湾標準海面値(T.P.)で表示した。また、土色、遺物の色調については小山・竹原編『新版標準土色帳』を使用した。
7. 出土遺物および各種記録類は富田林市立埋蔵文化財センターで保管している。
9. 調査の実施および本書の作成にあたっては、中村浩氏(大谷女子大学)、佐々木理氏(藤井寺市教育委員会)、藤田徹也氏(河内長野市教育委員会)に有益なご助言、ご協力を頂きました。記してここに感謝の意を表します。

本文目次

はじめに

例言

I	位置と歴史的環境	1
II	調査に至る経過と調査範囲・調査方法	3
III	発掘調査の成果	4
1	各調査区の遺構	4
2	出土遺物	11
①	須恵器類	11
②	その他の遺物	15
VI	まとめ	17

出土須恵器観察表

挿図目次

第1図	西板持遺跡周辺遺跡分布図	2
第2図	調査区配置図	3
第3図	第1調査区平面図①・断面図	5
第4図	第1調査区平面図	6
第5図	第2～第7調査区平面図・断面図	8
第6図	第8調査区平面図・断面図	9
第7図	西板持遺跡遺構関連図	10
第8図	須恵器蓋杯	12
第9図	須恵器高杯・小型短頸壺・器台・罍・甕・壺	14
第10図	庄内式並行期土器・土師器・土製品・埴輪	16
第11図	土師質韓式系土器	18

図版目次

図版1	(上) 第1調査区溝2全景 東から
	(下) 溝2遺物出土状況 南から
図版2	(上) 第1調査区溝1全景 東から
	(下) 溝1遺物出土状況 北東から
図版3	出土遺物
図版4	出土遺物

I 位置と歴史的環境（第1図）

西板持遺跡は、金剛葛城山系の支脈である佐備丘陵の縁辺部の低位段丘上に位置しており、市内を南北に流れる石川と、石川の支流である佐備川との間に形成された遺跡である。遺跡の範囲は東西約0.45km、南北約1.1kmに及んでいる。

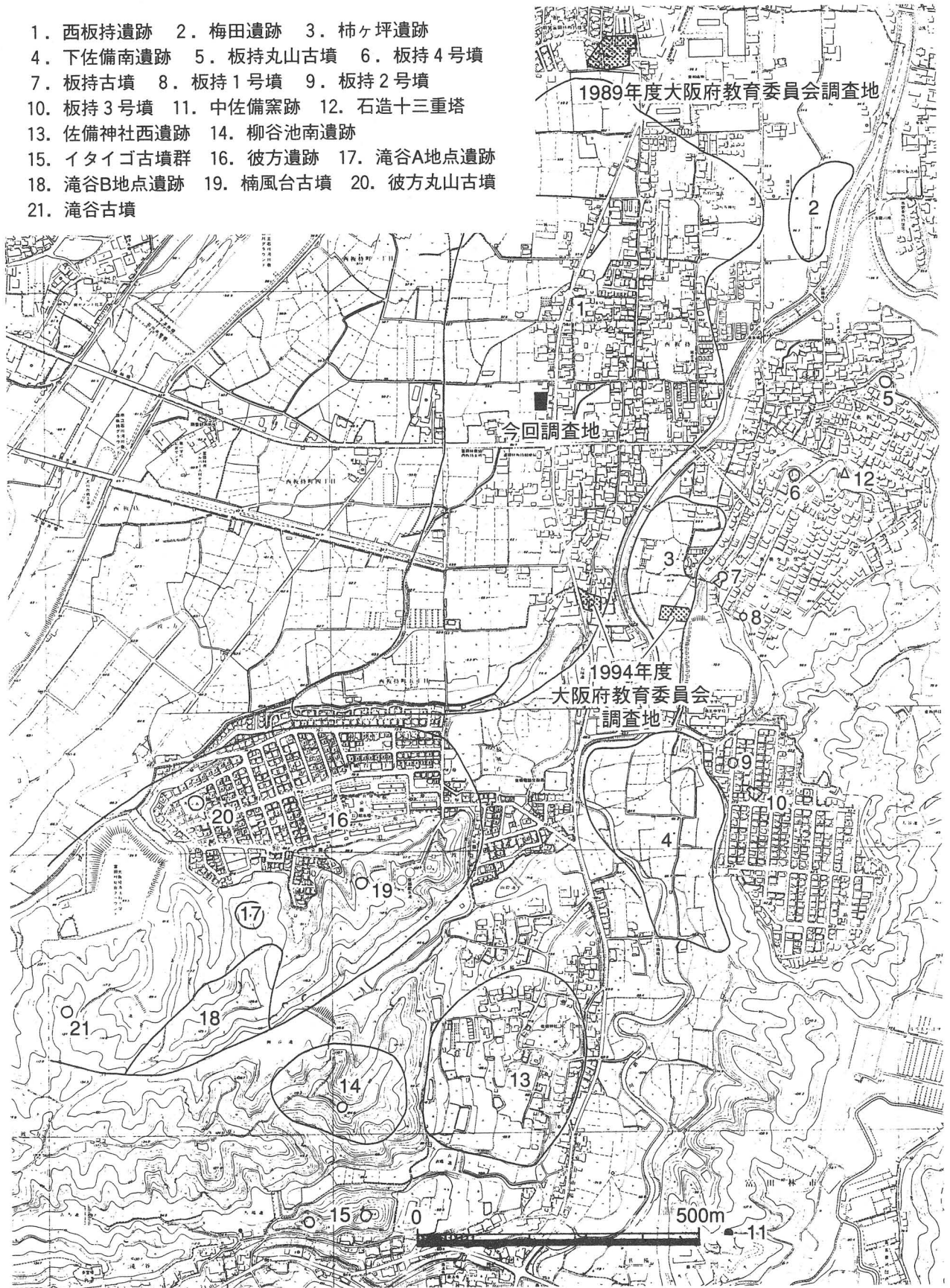
西板持遺跡は古くから遺物の散布地として認識されており、採集された遺物からこの遺跡が弥生時代から中世にかけての複合遺跡である事が推測されていた。本市ではこれまでに西板持遺跡を本格的に発掘調査する機会には恵まれてこなかったが、大阪府教育委員会によって1990年には府営住宅建設にともなう調査（註1）が、1994年には国道309号線の新設改良工事にともなう調査が行われている（註2）。特に1994年の調査では、中世以降の耕作土・畦・鋤溝などが確認され、またその下層からは佐備川の旧河道が検出されている。旧河道の埋土からは縄文時代後期の土器が出土しているが、最下層からの須恵器片出土も報告されている。いずれにせよ、西板持遺跡周辺の人類の活動が縄文時代後期にまでさかのぼることが確認された重要な成果と言える。また、佐備川を挟んで西板持遺跡と東接する柿ヶ坪遺跡では、同様に大阪府教育委員会の調査により、庄内式並行期の落ち込みと不明遺構、布留式期の土器廃棄遺構が検出されており（註3）、少なくとも弥生時代の終末にはこの地域に人々が定住し始めたものと考えられる。

今回の調査に関わる古墳時代の石川東岸・佐備川流域の歴史的環境を見てみると、西板持遺跡の東側、まさに遺跡を見下ろせる佐備丘陵上には板持丸山古墳・板持古墳・板持1～4号墳の6基で構成される板持古墳群が立地している。このうち、最北部に位置する板持丸山古墳は直径約35mの円墳であり、開発により消滅してしまっているが、明治36年（1903年）に変形半円方形帯神獸鏡が出土している。破壊の際に多数の埴輪片と葺石の散布が認められており、本地域の首長墓の初現と考えられる（註4）。また同様に消滅してしまっているが、板持古墳は全長40mに満たない前方後円墳である。現在形象埴輪片だけが知られているが、前期～中期前半の時期が考えられている（註5）。1967年には、開発にともない板持2・3号墳の発掘調査が行われた（註6）。板持3号墳は全長約40mの前方後方墳であり、発掘調査により粘土棺床を有する木棺直葬の主体部が確認された。主体部からは重圏放射線文鏡と鉄器・青銅器類が出土している。土器類の出土は土師器の細片のみであり時期の特定は困難であるが、銅鏃の存在から前期末の築造時期が想定されている（註7）。板持2号墳は直径約15mの円墳であり、木棺直葬の主体部が確認されている。棺内副葬は鉄製刀子1点のみであるが、棺外には須恵器・土師器と共に約400点の土製丸玉が副葬されていた。須恵器の形態から6世紀前半の時期が与えられる。このように、板持古墳群は古墳時代前期から後期前半まで、多少の断絶時期はあるようだがある程度の時期差を有しながら存続しているようであり、南河内における地域的な集団の首長墓のありかたを示しているものと考えられる。

また注目すべき遺跡としては、西板持遺跡から約1km南方の佐備川東岸に造営された中佐備須恵器窯が挙げられる。この窯では5世紀末から6世紀前半までの須恵器が製造されていることが確認されており（註8）、この時期の陶器に対する地方窯のありかたを考える上で非常に重要な資料である。

以上に述べたように、佐備川流域の古墳時代の様相は、生産遺跡、墳墓に関しては手がかりの一端を得ているものの、集落遺跡に関しては不明確な部分が多かったと言える。

1. 西板持遺跡
2. 梅田遺跡
3. 柿ヶ坪遺跡
4. 下佐備南遺跡
5. 板持丸山古墳
6. 板持4号墳
7. 板持古墳
8. 板持1号墳
9. 板持2号墳
10. 板持3号墳
11. 中佐備寮跡
12. 石造十三重塔
13. 佐備神社西遺跡
14. 柳谷池南遺跡
15. イタイゴ古墳群
16. 彼方遺跡
17. 滝谷A地点遺跡
18. 滝谷B地点遺跡
19. 楠風台古墳
20. 彼方丸山古墳
21. 滝谷古墳



第1図 西板持遺跡周辺遺跡分布図 (S=1/10000)

【註】

1. 枅本哲 (1990), 大阪府教育委員会 (編)『西板持発掘調査概要』, 大阪
- 2・3. 小浜成 (1995), 大阪府教育委員会 (編)『柿ヶ坪・尾平・西板持・寛弘寺遺跡発掘調査概要』, 大阪
- 4・5・7. 北野耕平 (1985)「第五章 古墳時代の富田林」, 富田林市教育委員会 (編)『富田林市史』第1巻, 富田林 (大阪)
6. 堀江門也 (1967), 富田林市教育委員会 (編)『富田林市板持古墳群調査概報』, 富田林 (大阪)
8. 中辻亘・粟田薫 (1987), 富田林教育委員会 (編)『中佐備須恵器窯跡発掘調査概要』(富田林市埋蔵文化財調査報告15), 富田林 (大阪)

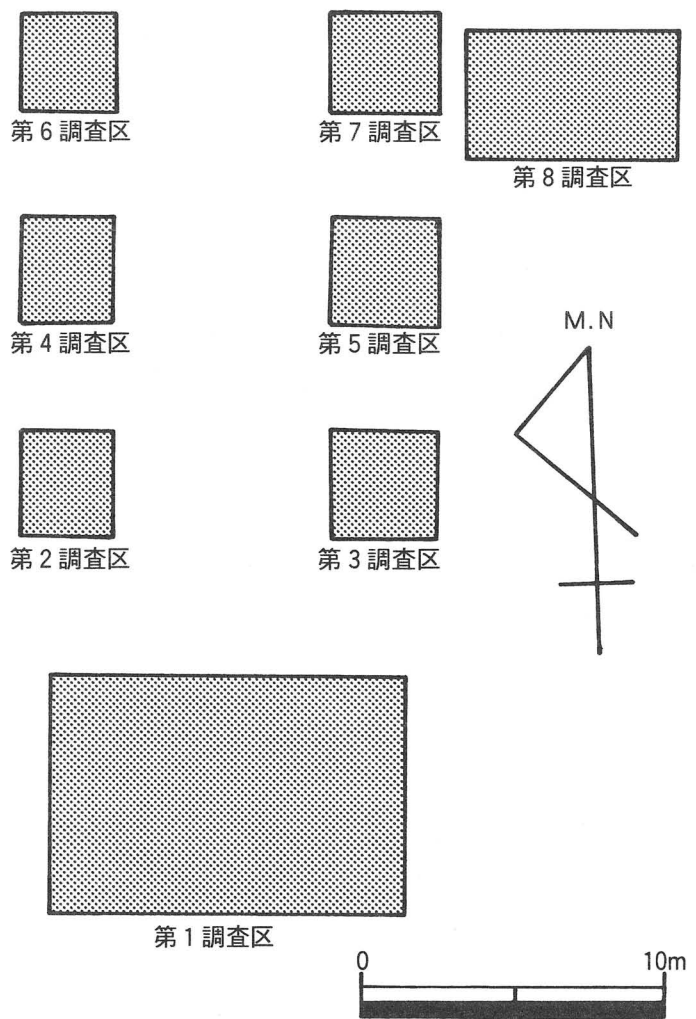
II 調査に至る経過と調査範囲・調査方法 (第2図)

今回の調査原因は富田林市西板持3丁目398-3、398-4の地における『(仮称)西板持コミュニティ施設兼老人いこいの家』の建設にともなうものである。建設工事に先立ち2002年7月5日に事前調査を行ったところ、遺物包含層と共に遺構の一部と考えられる落ち込みを確認したため、同年8月19日から9月6日までの期間で発掘調査を行った。

調査範囲は、建設工事によって遺構面が破壊される基礎杭・浄化槽の範囲を対象として、第1～第8までの調査区を設定した。調査面積は合わせて約192m²に及ぶ。

基本層序は大別すると①表土(調査区の大部分で2面の耕土・床土が形成されている)、②にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土層、③黄褐色(10YR5/8)に褐灰色(10YR5/1)が混ざる粘質土層(瓦器混ざる)、④褐灰色(10YR4/1)強粘質土層(古墳時代の遺物包含層)、⑤遺構面(第1調査区以外では地山を遺構面としている)となっている。

調査方法は、調査期間の制限もあり遺構面直上まで重機で掘削を行い、掘削中に基本層序第4層から出土した遺物はできうる限り取り上げた。



第2図 調査区配置図 (S=1/250)

Ⅲ 発掘調査の成果

1. 各調査区の遺構

第1調査区（第3・第4図）

この調査区では、東西方向の溝2本を検出した。2本の溝は、間層を挟まずに上下に重なっており、下層のものを溝1、上層のものを溝2とする。

溝1は東西に延びる幅広の溝であり、調査区西端で南側に急激に迂曲している。調査区内の大部分では溝の南側肩部から溝底までの検出となったが、僅かに北側肩部確認できる調査区西端での溝幅は約4mである。その北側肩部には同時にピット群が検出された。検出面積が狭いこともあるが、現状では配列、遺構の深さの規則性は確認できない。溝の肩部からの落ち込みは緩やかなものであり、現状で肩部からの深さは0.5mである。底面は西から東に僅かに傾斜しているが、溝の西端と東端との底面高低差は0.1m程度のものである。また、調査区西側では溝は地山を掘り込んで形成されているが、調査区東側の南側肩部は粘土層（褐灰色10YR5/1に橙色7.5YR6/8が混ざる）を基盤面としている。これは、従来地形が北から南に低まることに加え、調査区東部の地山上に堆積する弥生時代末期の遺物を含む層が不安定な砂層であることから、溝形成時に人為的に整地を行ったものと考えられる。

溝内埋土は底面付近には砂質土（黄灰色2.5Y6/1）が、肩部付近には強い粘質土（黄灰色2.5Y5/1）が堆積している。溝内からは、5世紀中頃～後半を中心とする多量の須恵器、土師器と共に、サヌカイト製の石錐、石核、剥片、ウマの歯骨などが出土している。

溝2は溝1を再度掘り直して利用したものである。溝の規模は溝1と比べるとかなり縮小しており、現状で溝幅約1.2m、深さ約0.2mである。溝1と同様に西から東に僅かではあるが傾斜している。溝内埋土は砂・砂質土であり、水流のあった痕跡を残している。内部からは、6世紀初頭～前半を中心とする須恵器、土師器と共に、サヌカイトの剥片が出土している。

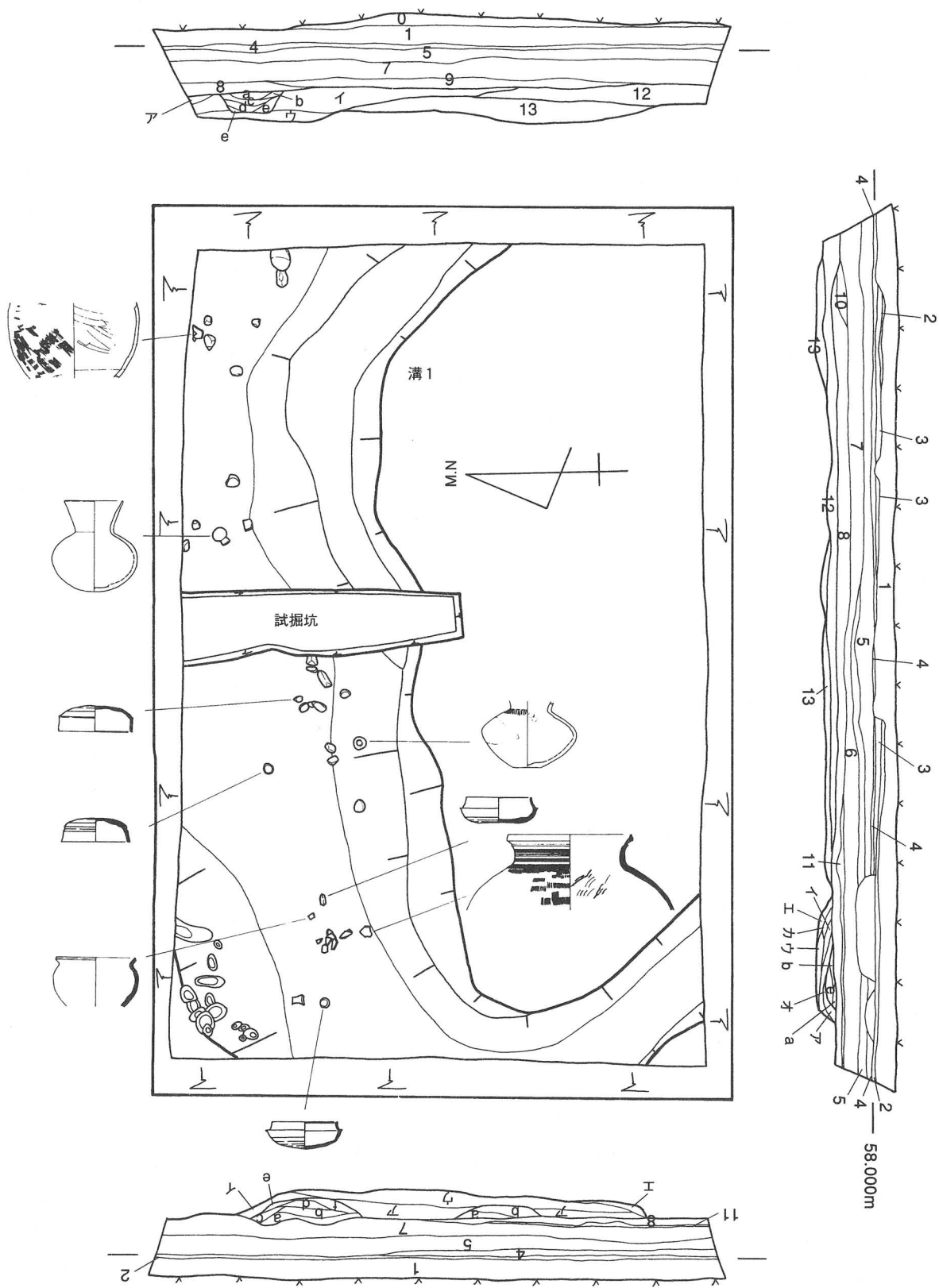
前述したとおり、第1調査区の東半部には地山上に弥生時代末期（庄内式並行期）の土器を包含する層が存在する。遺物は土器の小破片が地山の不整形な落ち込み内に散在する状況であったが、それらの落ち込みは遺構と呼べる状況のものではなく、また遺物の出土状況も人為的な何らかの行為を示しているものとは考えられなかった。堆積している土質は冠水した状況を示しており、周辺の集落遺跡などから洪水・氾濫などによって地形の低所に遺物が流入したものと思われる。また、少量ながら溝1からも弥生時代中期～庄内式並行期の土器が出土している。これらは溝自体に流入しているものの他にも、遺構掘削時に下層まで掘り込んでしまったため混入したものがある。

第2調査区（第5図）

この調査区では、南西から北東方向に延びる溝を検出した（溝3）。現状で溝幅約3.4m、深さ約0.3mである。底面は僅かに南西から北東に傾斜している。溝内埋土には、底面には粗砂（灰白色10YR7/1）が、上層には粘質土（黄灰色2.5Y5/1,6/1）が堆積している。内部からは5世紀中頃から6世紀前半を中心とする須恵器、土師器と共に、円筒埴輪片、不明土製品、サヌカイトの剥片などが出土している。須恵器甕には第1調査区溝1の破片と接合するものがあり、ほぼ同時期に形成された溝であることが分かる。

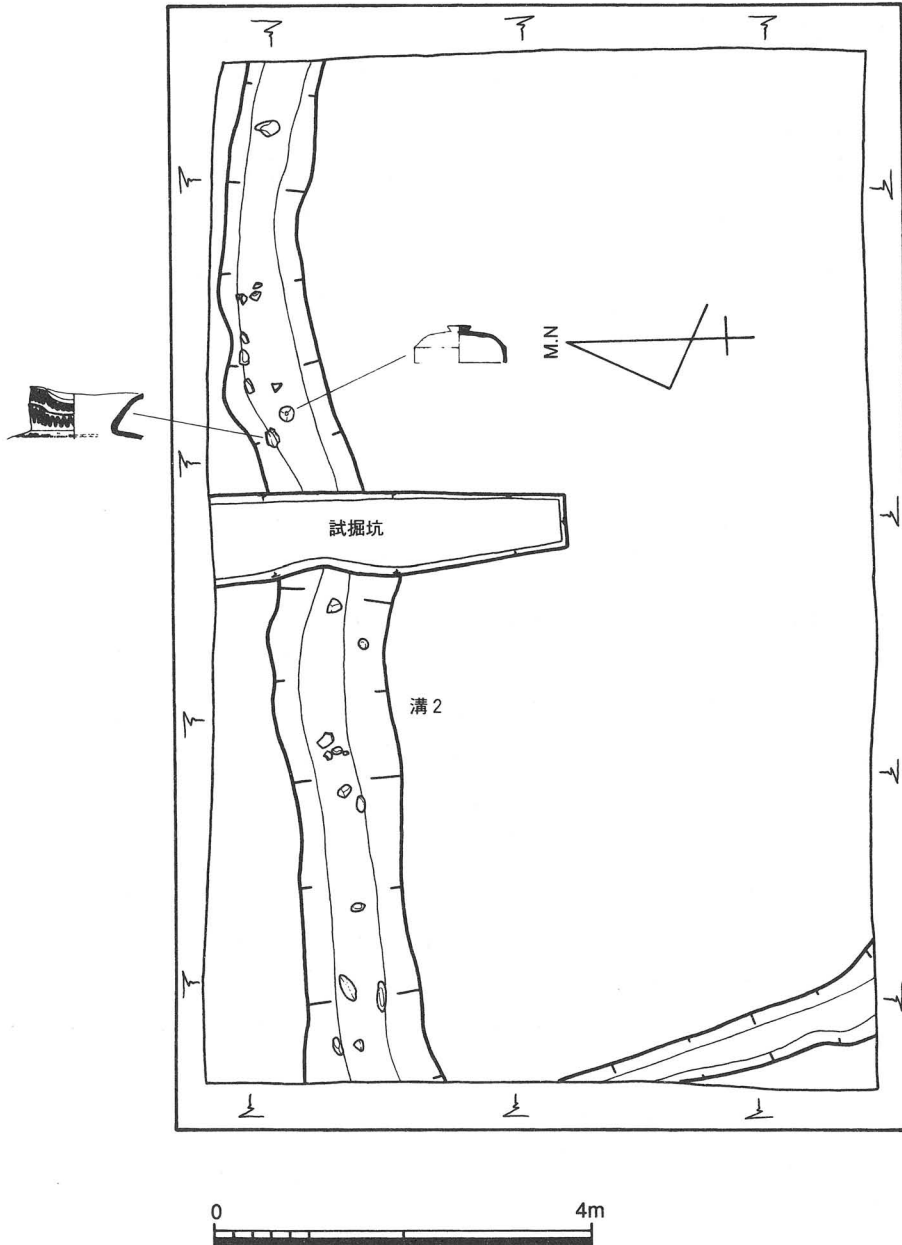
第3調査区（第5図）

遺構としては、調査区東南端部で溝の肩部（溝4）を、また地山面に足跡群を検出した。



第3図 第1調査区平面図①・断面図 (S=1/80)

0. 盛土
1. 表土 2. 床土 3. 旧耕土 4. 旧床土 ~基本層序 1
5. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土 ~基本層序 2
6. 黄褐色 (10YR5/8) に褐灰色 (10YR5/1) の混ざる砂質土 ~基本層序 3
7. 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土
8. 褐灰色 (10YR4/1) 強い粘質土 ~基本層序 4
9. 灰黄色 (2.5Y6/2) 粗砂
10. 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘性砂質土
11. 灰白色 (2.5Y7/1) 細砂
12. 褐灰色 (10YR5/1) に橙色 (7.5YR6/6) の混ざる粘土 ~古墳時代の整地土
13. 灰白色 (2.5Y8/2) 細砂 ~弥生時代後期の遺物を含む



溝1埋土

- ア. 灰黄褐色 (10YR6/2) 細砂
- イ. 黄灰色 (2.5Y5/1) 強い粘質土
- ウ. 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質土
- エ. 黄灰色 (2.5Y5/1) 強い粘質土
- オ. 褐灰色 (10YR6/1) 弱粘質土
- カ. あざい黄色 (2.5Y7/3) 細砂

溝2埋土

- a. 灰白色 (10YR7/1) 細砂
- b. 褐灰色 (10YR6/1) 粘性砂質土
- c. 灰黄褐色 (10YR6/2) 粗砂
- d. 灰白色 (10YR7/2) 細砂
- e. にぶい黄橙色 (10YR6/3) 粗砂
- f. あざい黄色 (2.5Y7/3) 細砂

第4図 第1調査区平面図② (S=1/80)

溝4は南西から北東方向に延びる溝の肩部を検出している。埋土は強い粘質土（黄灰色2.5Y5/1）であるところから、第1調査区溝1の延長で同一遺構と考えられるが、遺物は出土していない。

足跡群には、人の足状のものと同蹄類のものに分けられる。この内有蹄類のものはシカ、イノシシなど偶蹄類に属するものようである。しかしながら歩行の方向・単位などを確認するには至っていない。

第4調査区（第5図）

溝2本（溝5・6）、土壌2基、ピット3基を確認した。

溝5・6は調査区南端を南西から北東に延びる溝である。両者は溝6が溝5の北側肩部を切る形で併走しているが、平面検出時には両者を1本の溝と誤認してしまったため、掘削後に土層断面で別遺構であることが確認された。両者とも底面は南西から北東に傾斜している。遺構内からは、5世紀中頃から6世紀前半に該当する須恵器片と土師器片が出土しているが、それぞれがどちらの遺構に属するものかは明らかにできない。

土壌1・2は層位的に溝6より古い時期の遺構である。両者とも不整形の土壌であり、土壌1からは土師器片が出土しているが、小片であるために器種・所属時期は不明である。

ピット群は土壌1・2を切る形で形成されている。配列・底面の深さから一連の施設であると考えられるが、調査範囲が狭いこともあり性格を明らかにすることはできない。ピット内からは遺物は出土していない。

第5調査区（第5図）

南西から北東に走る溝（溝7）を検出した。現状で溝幅約2.7m、深さ約0.1mである。底面は南西側から北東側に緩やかに傾斜している。溝内埋土は灰白色（10YR7/1）粗砂であり、溝内からは須恵器片、土師器片が少量出土している。蓋杯の口縁片の形態から、5世紀後半から6世紀前半におさまるものである。

溝の形態、埋土の性質から、この溝は第2調査区の溝3の延長で同一遺構と考えられる。

第6調査区（第5図）

この調査区では基本層序第2層の直下が地山であり、遺構は確認されていない。地山の標高は57.9mであり、全調査区内で最も地山の高い部分である。各調査区の地山面の高さを見ると、従来の地形は北西から南東に緩やかに下っていく地形であったことが分かる。

第7調査区（第5図）

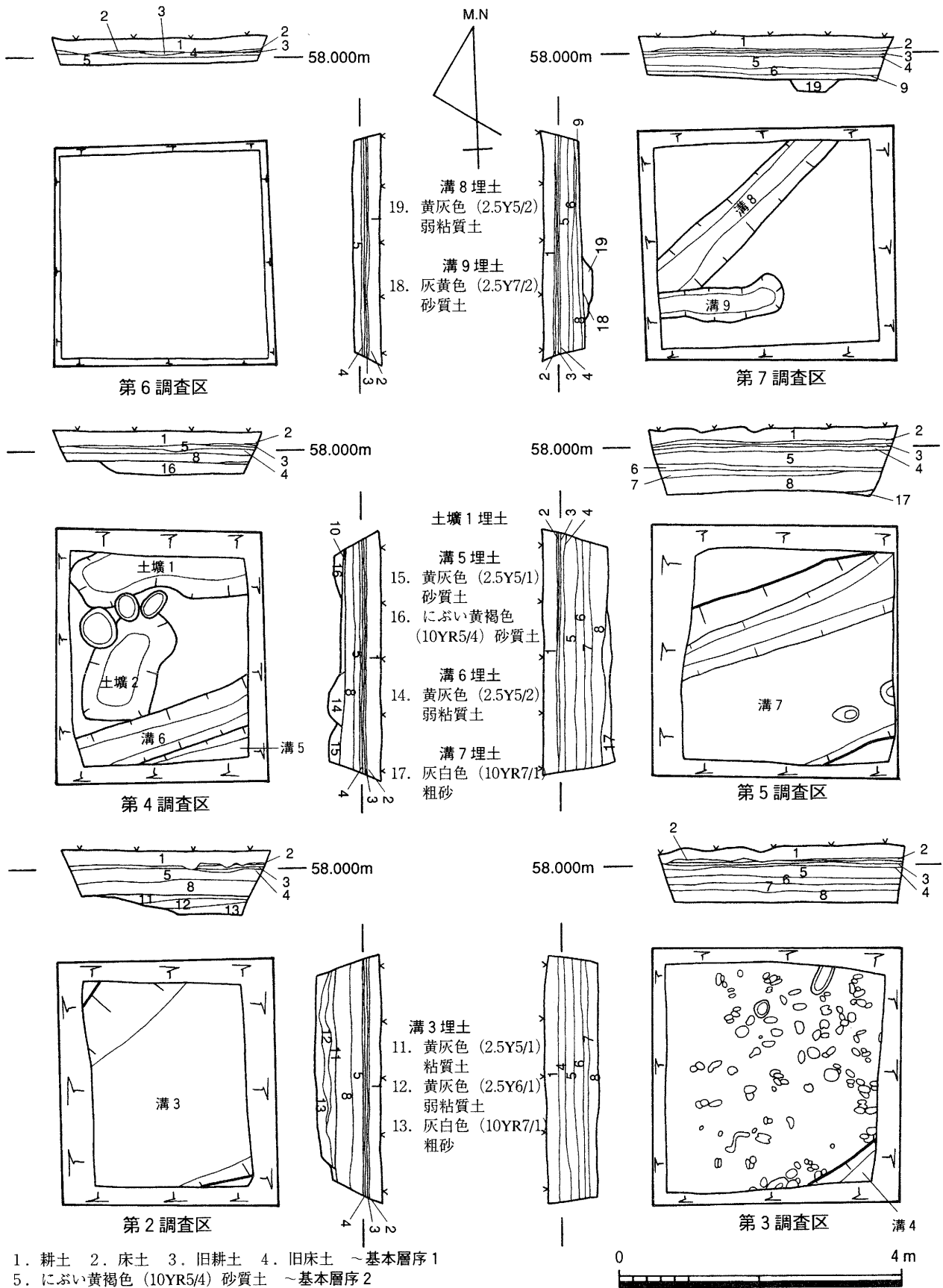
この調査区では溝2本が検出された（溝8・9）。溝8は幅約0.5m、深さ約0.14mの南西方向から北西方向に延びる溝である。溝の埋土の性質から、この溝は第4調査区の溝6の延長で同一遺構と考えられる。遺構内からは5世紀後半の須恵器杯蓋片と土師器甕の小片が出土している。

溝9は東西方向に延びる溝であり、調査区西端で溝8を切っている。溝は調査区の中程で途切れている。

第8調査区（第6図）

この調査区では、調査区中央を南西から北東に延びる溝（溝10）と、調査区東端に同じく南西から北東方向に延びる溝（溝11）を検出した。

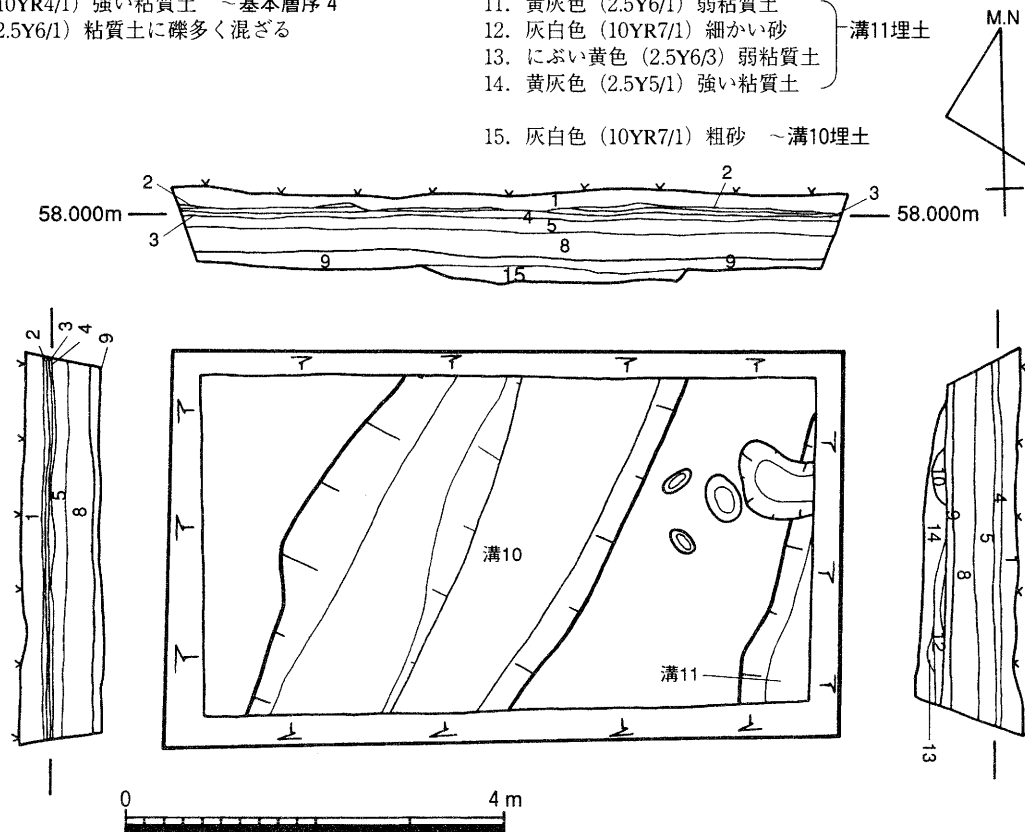
溝10は現状で幅約3.2m、深さ約0.1mである。溝内には灰白色（10YR7/1）粗砂が堆積しており、埋土内からは須恵器片、土師器片、サヌカイトの剥片が出土している。須恵器蓋杯類は口縁部片数点が出土しているだけであるが、形態から上限は5世紀後半であろう。底面はほぼ平坦であり、溝の形状・埋土の性質から第2調査区の溝3、第5調査区の溝7に繋がるものである。



1. 耕土 2. 床土 3. 旧耕土 4. 旧床土 ~基本層序 1
5. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土 ~基本層序 2
6. 黄褐色 (10YR5/8) に褐灰色 (10YR5/1) の混ざる砂質土 ~基本層序 3
7. 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土
8. 褐灰色 (10YR4/1) 強い粘質土 ~基本層序 4
9. 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質土に礫多く混ざる
10. 褐灰色 (10YR4/1) 弱粘質土

第5図 第2～第7調査区平面図・断面図 (S=1/80)

- | | | | | | | |
|-----------------------------|--------|--------|-------------------------|--------------------------|--------------------------|-------|
| 1. 耕土 | 2. 床土 | 3. 旧耕土 | 4. 旧床土 | ～基本層序1 | 10. 灰黄褐色 (10YR5/2) 強い粘質土 | ～土壌埋土 |
| 5. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質土 | ～基本層序2 | | | 11. 黄灰色 (2.5Y6/1) 弱粘質土 | } 溝11埋土 | |
| 8. 褐灰色 (10YR4/1) 強い粘質土 | ～基本層序4 | | | 12. 灰白色 (10YR7/1) 細かい砂 | | |
| 9. 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質土に礫多く混ざる | | | | 13. にぶい黄色 (2.5Y6/3) 弱粘質土 | | |
| | | | 14. 黄灰色 (2.5Y5/1) 強い粘質土 | | | |
| | | | | 15. 灰白色 (10YR7/1) 粗砂 | ～溝10埋土 | |



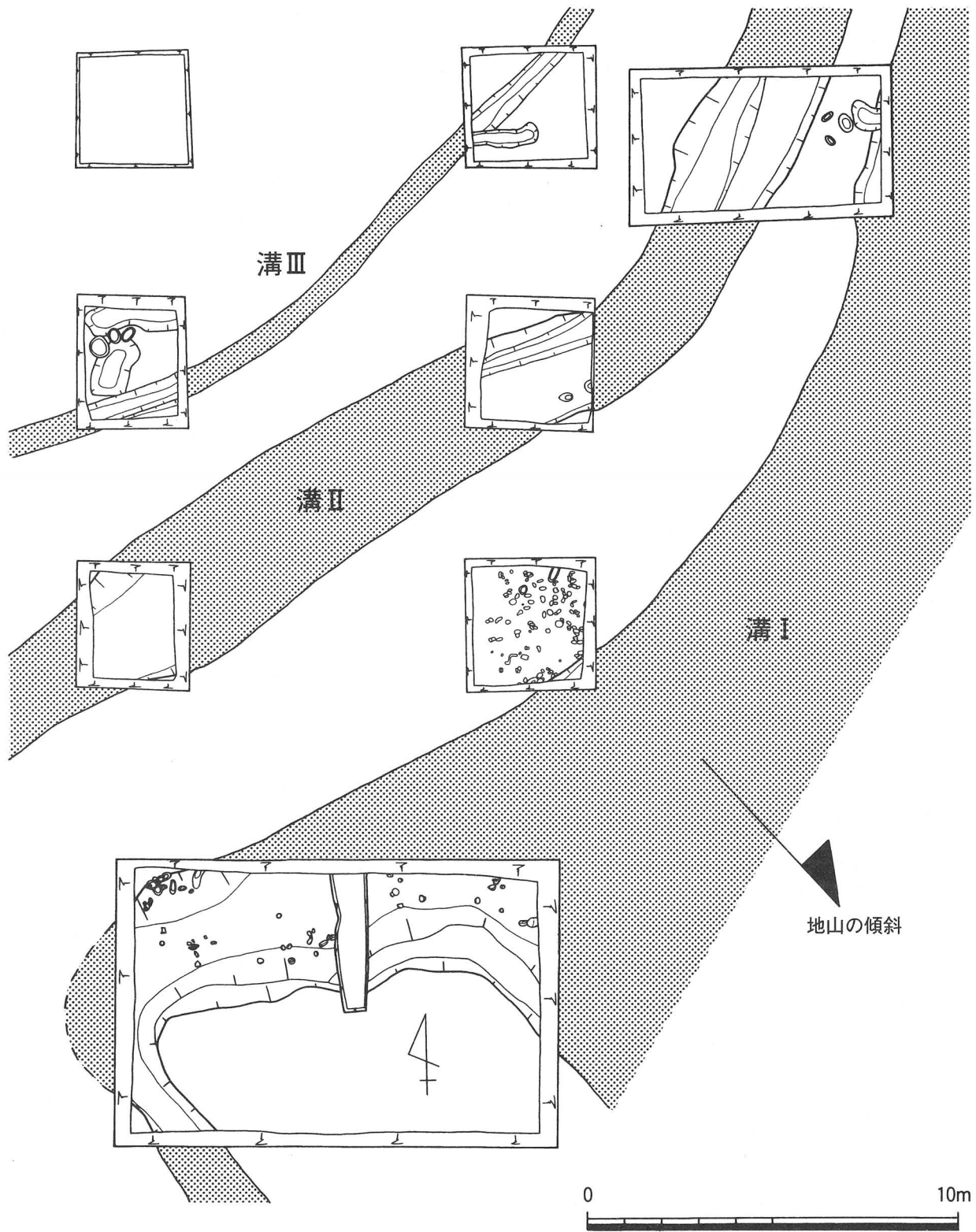
第6図 第8調査区平面図・断面図 (S=1/80)

溝11は調査区の端部での検出であるため、溝の北西側肩部だけが確認されたに過ぎない。しかしながら、埋土の性質が黄灰色 (2.5Y5/1) の強い粘質土であることから見ても、第1調査区の溝1、第3調査区の溝4に繋がる溝と見なして良さそうである。埋土内からは、須恵器、土師器の小片が出土しているが、器形の判明するものは僅かに甕、壺類の体部のみである。

この他に、調査区東側においてピット、土壌を検出している。時期の判明する遺物の出土はないが、調査区東端に位置する土壌が溝11を切っているため、一連の溝とは時期を異にするものである。

以上の結果から各調査区で検出された遺構の関連をまとめてみると、第1調査区の溝1が第3調査区の溝4、第8調査区の溝11に繋がる可能性が高く、第2調査区の溝3が第5調査区の溝7、第8調査区の溝10に、第4調査区の溝6が第7調査区の溝8に繋がるものと思われる。

この様に想定すると、これらの3本の溝は南東方向に緩やかに下る地山の傾斜に対して直交する方向に営まれていることが分かる (第7図)。仮にこれらの溝を南から溝Ⅰ・Ⅱ・Ⅲと命名すると、溝Ⅰ・Ⅱの埋土状況は明らかに水流のあったことを示しており、また溝の底面が緩やかではあるが南西から北東に低下してゆくことを見ると、自然地形に反する方向に水を引く何らかの必要があったものと考えられる。溝の深さは現状で溝Ⅰが約0.5m、溝Ⅱが0.1～0.2mと非常に浅いものである。遺構面上面が削られている可能性を考慮に入れても、集落などの空間を区画する溝としてはやや貧弱な感がある。現状では生活の水利と関係のある施設と見なしておきたい。



第7図 西板持遺跡遺構関連図 (S=1/160)

2. 出土遺物

今回の調査では、コンテナ6箱分の須恵器・土師器を中心とする遺物が出土している。しかし、その大多数が器形を復元できない破片であった。ここでは、図化の行える資料を中心に、特徴ある資料を抽出して報告を行う。

①須恵器類

【杯蓋（第8図）】口縁部で個体数を計測すると、杯蓋は第1調査区溝1から56点、第1調査区溝2から78点、第2調査区溝3から3点、第5調査区溝7から6点、第7調査区溝8から1点、第8調査区溝10から6点、包含層から8点が出土している。しかしながら、全体形をある程度復元可能な個体は溝1から出土している8点（15～22）と溝2から出土している5点（1～5）、包含層出土の1点（29）に過ぎない。

溝1出土の資料では、口径が13cm未満の小型品が多数であることが特徴として挙げられる。また、口縁端部の処理も段及び凹線状に仕上げるものが多数であり、口縁と天井との境界部を明確な稜線が稜線で示しているものが多数を占める。資料の中でも天井部が平らに近い21、22などは5世紀中葉の杯蓋の様相を示す。なお、21は天井部に回転カキメを施している。また23のように天井部に円形に2条沈線を廻らせ、内部に同じく沈線で加飾する蓋破片も出土している。

溝2出土資料は、口径が13cm以上と大型化しているものが多く、口縁端部も緩やかに内傾しておさまる傾向が見られる。口縁と天井の境界部も凹線によって示されるもの（2・4・5）が存在する。形状から、6世紀前半の様相をすものが多い。

【杯身（第8図）】杯蓋同様口縁部で個体数を計測すると、第1調査区溝1から48点、溝2から62点、第2調査区溝3から7点、第4調査区溝5・6から4点、第5調査区溝7から1点、第8調査区溝10から5点、包含層から6点が出土している。この内、図化可能なものは第1調査区溝1出土の6点（24～28）、第1調査区溝2出土の9点（6～14）、包含層出土の3点（30～31）である。

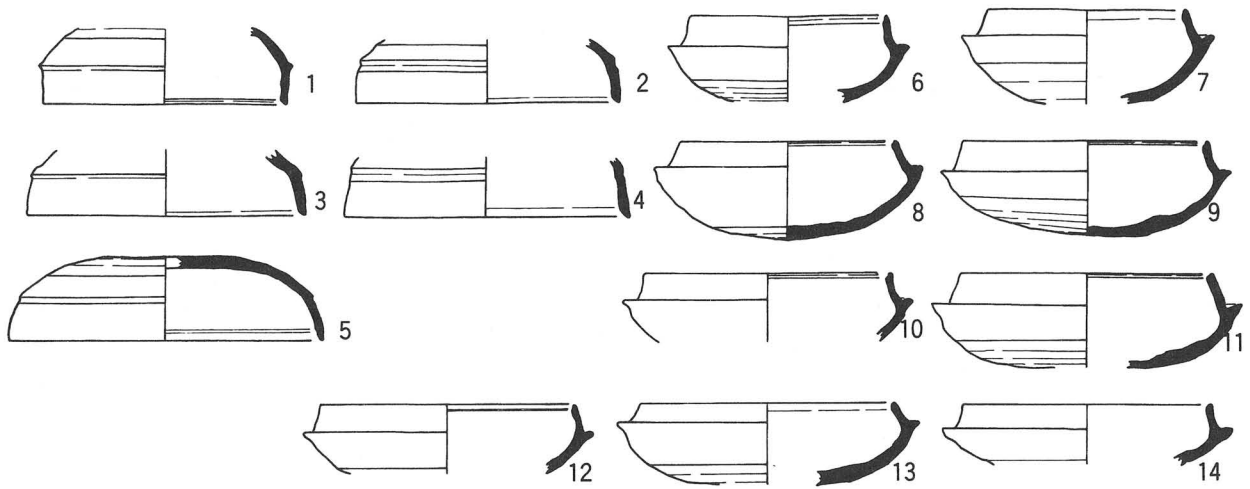
溝1出土の資料では、底部が平らであり口縁が高く立ち上がり端部が僅かに凹面をなす25が5世紀中葉の様相を示し、底部が半球形の底部を有し、口縁が上方に立ち上がり端部に明確な段をなす26がほぼ同時期かやや遅れるのものであろう。なお、25には底部外面に直線3本のヘラ記号と受部下に小さな菱形のヘラ記号が施されている。同様の菱形記号は、26の底部外面にも見られる。

溝2からは、口径が小さく口縁がやや上方に立ち上がる6など5世紀末に位置づけられるものも出土しているが、口径が大型化し、口縁も短く内傾気味に立ち上がるものが主体を占める。形態から6世紀前半に該当する資料といえる。なお、6には底部外面に直線3本のヘラ記号が認められる。

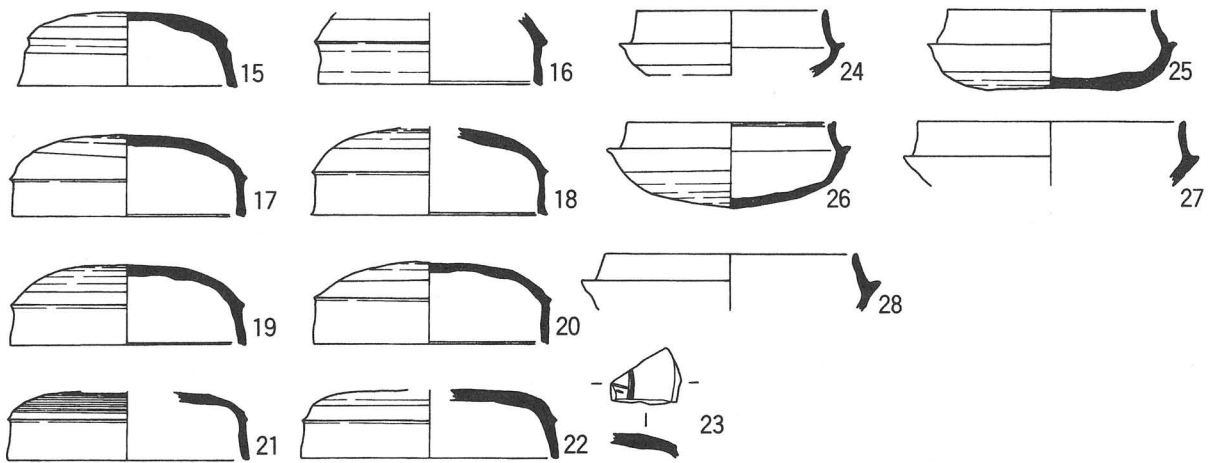
【同心円スタンプ（第8図）】計6点が出土している。いずれも蓋杯の破片であるが、身・蓋の判別はつけ難い。小片である2点を除くと、いずれも内面中央付近に2回、もしくはそれ以上のスタンプを重ねている（33～36）。この内33～35は溝2出土であり、6世紀前半の特徴を示すものと言える。36は包含層出土品である。

【ヘラ記号（第8図）】計9点が出土している。いずれも蓋杯類と考えられるが、破片資料であり記号全形の分かるものは少ない。上述したもの以外では、拓本で掲載した38は溝2出土のもので、おそらく「×」記号になるものと思われる。37は溝1出土である。

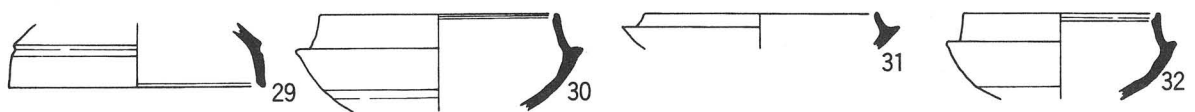
【高杯（第9図）】無蓋高杯（1～4）はいずれも杯部のみ残存しているものである。このうち1はやや深い体部を有し、波状文を1帯廻らせている。浅い体部を有する2～4は、体部と口縁部の境界に明瞭な段を有するもの3・4と軽い沈線で表現されるもの（5）とに分けられる。前者は口縁



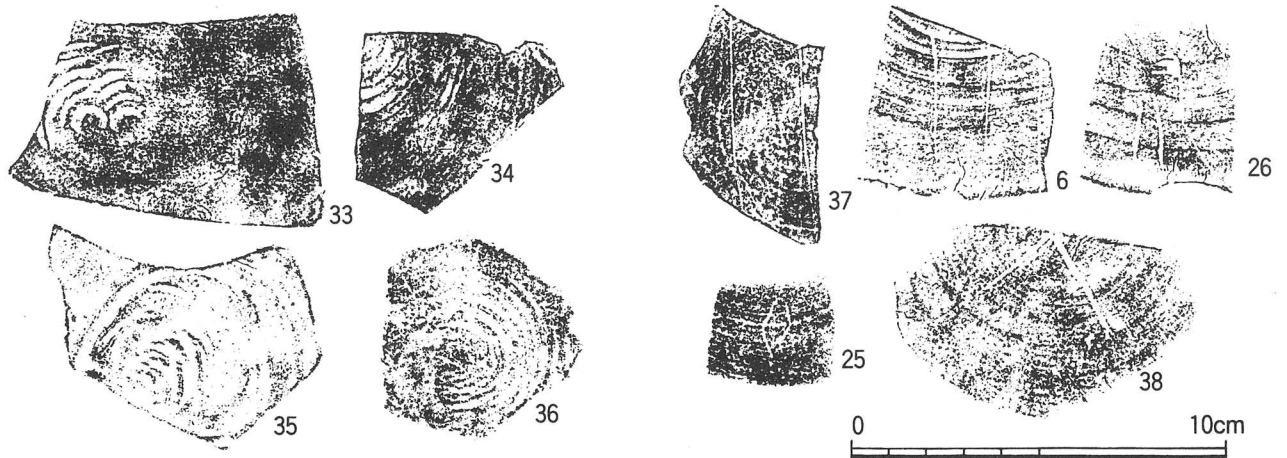
第1調査区 溝2出土蓋杯



第1調査区 溝1出土蓋杯



包含層出土蓋杯



第8図 須恵器蓋杯 (S=1/4、1/2)

部を大きく外反させるもの（3）とほぼ垂直に立ち上がるもの（4）の2種がある。後者は体部から緩やかに内湾しつつ立ち上がり、口縁端部を外方に短く屈曲させるものである。

有蓋高杯（5～7）は、短く突出する受部を有するもの（5・7）と、鐔状の長い受部を有する（6）とがある。5は口径8.4cmの小型品であり、体部に波状文を廻らせる。底部には手持ちヘラ削りが行われている。7は小片であるが、体部外面に沈線を2条廻らせ、内部に櫛状工具により綾杉状の刺突を施している。6は内湾する体部から上方に短く立ち上がる口縁を有している。体部には波状文を廻らせている。

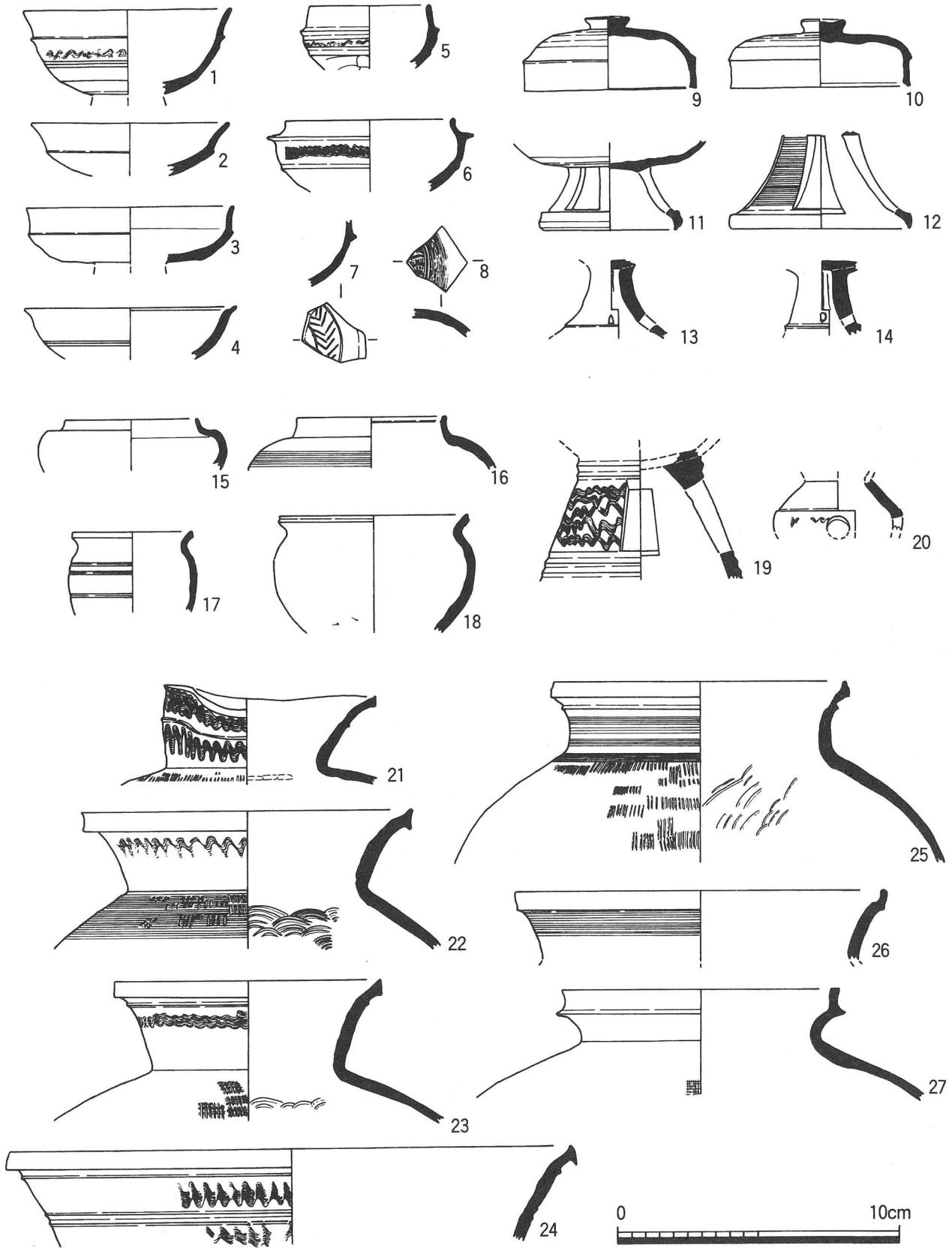
有蓋高杯の蓋は、つまみの存在から計4点の出土が確認できる。この内全体形の分かるものは9・10の2点である。10は平な天井部の杯蓋につまみを付加したものであり、天井と口縁の境界部には明瞭な稜を有する。口縁は直線的に垂下し、端部はやや内傾し凹面を形成している。9は10に対して丸みを帯びた天井部につまみを付加するものである。天井部形態以外には両者には大きな違いは見られない。両者ともつまみ部の中央を軽く突出させている。このことは、他の2点のつまみも共通した特徴である。いずれもつまみ径が3.1～3.2cmであることから、規格性の強い製品であることが分かる。

高杯脚部は、第1調査区溝1から7点、溝2から1点、第2調査区溝3から1点、第4調査区溝5・6から1点、包含層から6点が出土しているが、大半が小片であるため、異なる器種の脚部である可能性も含む。脚端部まで残存している11・12はいずれも第1調査区溝1出土のもので、長方形スカシを有している。11は杯部上半が欠失したもので、脚部は緩やかに外反しており端部を内湾気味に垂下させる。3方向スカシに復元される。12は杯部との接点で破損しており、脚部はやや強く外反し、端部を垂下させる形態である。4方向スカシに復元される。なお、11はナデ調整が、12は外面にカキメ調整が行われている。13は第2調査区溝3、14は包含層出土品である。両者とも杯部・裾部が欠失している。13は細い脚柱部から裾部に向かい大きく外反する古式のもので、裾部境界突線直上に細長い三角形（滴形）の小さなスカシが入る。スカシ数は不明である。これと類似したもので、14は脚柱部が緩やかに外傾するものであるが、やはり裾部境界突線直上に小さな滴形のスカシが4方向に入る。13とは異なり滴が下から上に向かう形状であるが、両者の違いはスカシ穿孔時のヘラ工具の向きから生じている。すなわち、13では上方から下方へと穿たれているのに対し、14では下方から上方に穿たれた結果形状の違いとして現れたものである。両者ともナデ調整である。**【小型短頸壺（第9図）】**有蓋（15・16）のものと無蓋（17・18）のものが存在する。第1調査区溝2出土の有蓋壺15は肩の張った体部にやや内傾する口縁を有するもので、口縁端部は丸く収められている。焼成時に蓋をかぶせていた痕跡が肩部上方に残っている。溝1出土の16はやや丸みを帯びた体部にカキメ調整が行われる。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部内面に段を有している。

第1調査区溝1出土の無蓋壺17は、ここでは壺として分類しているが、かなり異形のものである。腹部の張らない細長の体部に短く外反する口縁部を有している。体部には最大径部の上方に2条、下方に1条の微弱な沈線を廻らせている。溝2出土の18は最大径を体部上方に有するもので、短く外反させる口縁を有する。底部付近に僅かに手持ちヘラ削りの痕跡が残る。

【器台（第9図）】19は第2調査区溝3出土のもので、脚部最上段と台底部が残存している。脚部には4方向に長方形スカシを入れており、破面をヘラで調整している。スカシ上方に2条、下方に現状で2条の突線が廻らされており、間に5帯の波状文が廻らされている。施文は下→上の順に行われているが、波形は不規則な形状となっている。台部内面は小片であるため調整痕は不明である。

この他に、器台もしくは他器種の脚台で長方形スカシの入る破片が第1調査区溝2から1点、包



2 · 3 · 6 · 8 · 10 · 11 · 12 · 16 · 18 · 24 ~ 27 第1調査区溝1出土

1 · 5 · 9 · 15 · 17 · 21 第1調査区溝2出土

13 · 19 · 24 第2調査区溝3出土

20 第8調査区溝10出土

4 · 7 · 14 · 23 包含層出土

第9図 須恵器高杯・小型短頸壺・器台・臬・甕・壺 (S=1/4)

含層から2点出土しており、三角形スカシが入る破片が第1調査区溝1から1点、スカシ形態不明のものが包含層から1点出土している。

【甕（第9図）】20は第8調査区溝10出土である。注口部の1/4のみが残存する小型品の体部片であり、微弱な波状文がかすかに観察できる。

【甕（第9図）】頸部を大きく外傾または外反させるもの（21～24）と頸部が直立気味に立ち上がるもの（25・26）とに分類される。前者は有文であり、後者は無文である。21は第1調査区溝2出土のものであるが、頸部から口縁部が大きく焼き歪んでいる。口縁端部は上下に僅かに拡張させており、頸部は突線で区画された文様帯間に波状文を1帯ずつ廻らせている。体部には平行叩きが行われている。22は包含層出土のもので、口縁端部を上下に大きく拡張している。頸部には波状文が1帯廻らされており、体部外面は平行叩き後カキメが行われ、内面には同心円当て具痕が残る。第1調査区溝1出土の23は、口縁直下に突線を有し、頸部に波状文を廻らせている。体部は横方向の平行叩き後縦方向の平行叩きを行っており、内面は同心円当て具痕をナデ消している。21～23までは中型品であるが、24は第1調査区溝1・第2調査区溝3出土の接合資料であり、大型品の口縁部片である。口縁下端部を大きく拡張させており、口縁直下に1条、文様帯間に2条の突線を有する。第1調査区溝1出土の25・26は、直立気味に立ち上がる頸部で口縁端部を上方に拡張する手法において同様のタイプと言える。両者とも頸部はカキメ調整が行われる。25は体部外面の平行叩きを部分的にナデ消しており、内面は同心円当て具痕をナデ消している。

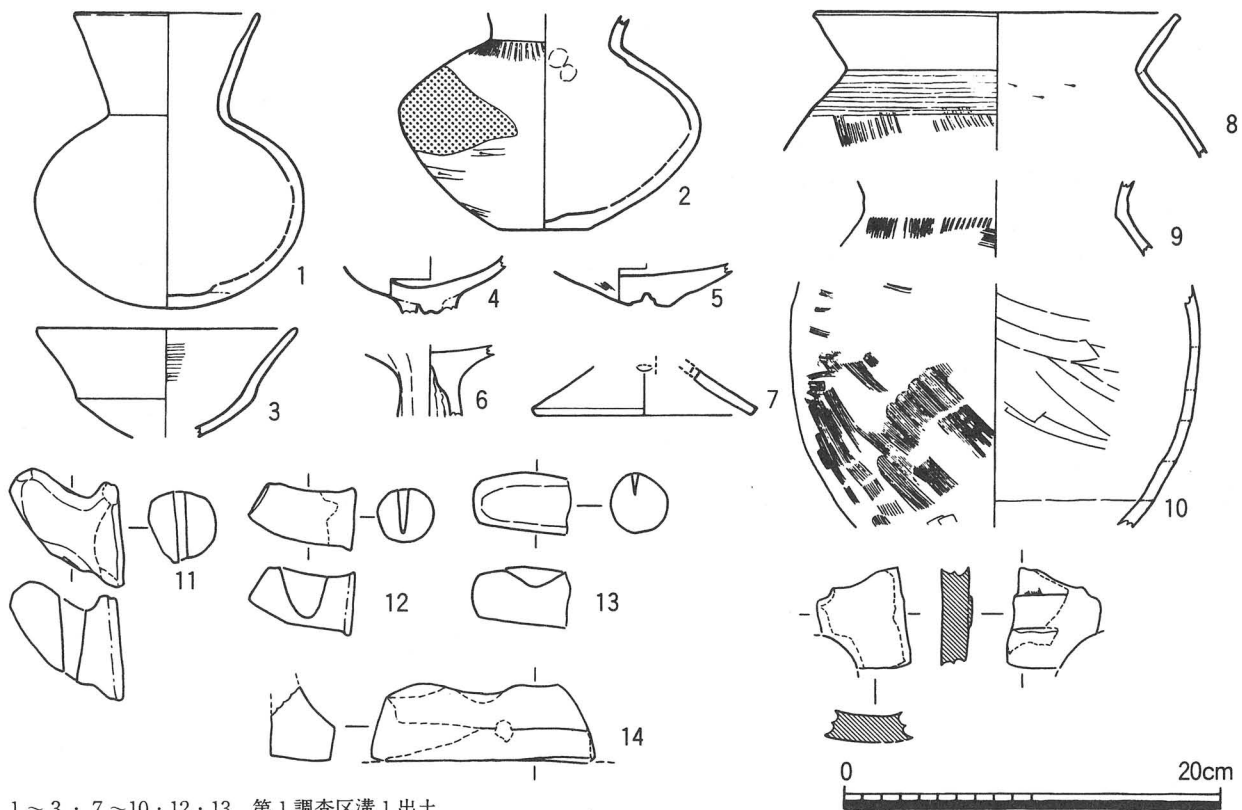
【壺（第9図）】第1調査区溝1出土の27は、短く外反する頸部にほぼ垂直に立ち上がる口縁を有するものである。頸・口縁境界部の突出が口径に対して受部としては微弱であるが、おそらく有蓋の壺になるものと思われる。体部外面にはかすかに格子叩きの痕跡が見られる。

この他の資料として、甕の底部に窯体の底に敷かれた粗砂が熔着している破片が包含層から出土している（図版4-①）。

②その他の遺物（第10・第11図、図版4）

【土師器・韓式系土器・庄内式並行期土器（第10）図】第1調査区溝1出土資料として、壺1、甕9・10、高杯7、把手12・13を掲載する。長頸の直口壺1は丸底でやや偏平な球状の体部を有する。体部下半は丸石状のもので磨いている。口径9.7cm、体部最大径14.2cm、器高15.7cm。灰白色を呈する。甕体部10は体部外面に細い原体で刷毛目を施す。体部下半は斜め方向に、上半は横方向に行っている。内面は細い板状工具でナデ調整を行う。また内部上半には煮炊きによるものと思われる付着物痕が残っている。甕9は、土師質の韓式系土器と考えられる。体部外面には縦横方向に平行叩きが行われている。高杯脚部7は端部を丁寧に面取りしており、径7mmの円形のスカシを有している。脚端部径11.3cm。12・13は甌の取手である。両者とも上面からヘラ工具で切り込みを入れているが貫通はしていない。12は挿入式の把手であり、やや牛角状に上方に湾曲する。端部は指押さえにより面を形成している。13は折損状況から見て貼付け式である可能性が高い。直線的に伸びる形態で、端部の面取りも甘い。いずれも韓式系土器甌の把手である。

この他に、溝1からは壺2、甕8、高杯3が出土している。壺2は平底に算盤玉形の体部を有する。口縁端部は欠失しているが、短頸になるものと思われる。頸部下から肩部にかけて縦方向のヘラ磨きが施され、体部下半から底部にかけてヘラ削りが行われる。腹部には黒斑残る。体部最大径16.0cm、底部径4.7cm、体部高10.0cm。橙色を呈する。形態から庄内並行期に属するものと考えられる。甕8は体部外面に左上がりの平行叩きを行い、頸部直下は横方向に刷毛調整を行っている。



1～3・7～10・12・13 第1調査区溝1出土
 4・6 第1調査区溝2出土
 14・15 第2調査区溝3出土
 5・11 包含層出土

第10図 庄内式並行期土器・土師器・土製品・埴輪 (S=1/4)

体部内面は横方向のヘラ削りを行う。口縁端部はナデにより面を形成している。口径7.4cm。にぶい橙色を呈する。一見在地の庄内式並行期の甕の様相を呈しているが、叩きの方向、器壁の厚みから見て韓式系土器である可能性が残る。高杯8は杯底部から内湾して立ち上がり、鈍い稜を形成して口縁が外方に伸びる器形である。内面はかすかに横方向の刷毛目が残る。口径13.7cm、浅赤橙色を呈する。杯部の浅い形態になることから、庄内式並行期のものと考えられる。

第1調査区溝2出土の資料としては、高杯4・6がある。4は杯部が椀形になるもので、杯底部中央の突起に脚柱部を挿入させるタイプである。6は杯部内面に暗文が残る。脚柱部内面には絞り痕が明瞭に残る。

第1調査区溝1及び溝2、第2調査区溝3からは韓式系土器と考えられる体部片が多数出土している。参考資料としてその一部を拓本・写真で紹介しておく(第11図、図版4-②)。

1～3、5、7、9、11は溝1出土、4・8・10は溝2出土、6は溝3出土の資料である。1は外面に斜め方向の平行叩きを行っており、内面は斜め方向に削りを行っている。2は外面に縦方向の平行叩きを行った後に横方向に沈線を廻らせている。内面はナデ。3は縦方向の平行叩きを行う。内面はナデ。4は頸部から体部にかけての破片であり、体部外面は縦方向の平行叩き、内面は横方向の削りを行う。頸部は横ナデ。5は外面に格子叩きが行われる。内面はナデ。6は外面に斜め方向の平行叩きが、内面には当て具痕が残る。当て具痕は同心円形になると思われる。7は外面に縦方向の平行叩き、内面は横方向平行線の当て具痕が残る。8は外面に斜め方向の並行叩き、内面に横方向平行線の当て具痕が残る。9は外面に横方向の平行叩き後縦方向の平行叩きが行われ、横方向の沈線が2条廻らされる。内面はナデ。10は外面に斜め方向の平行叩きが、内面に同心円の当て

具痕が残る。11は外面に縦・横方向の平行叩きが行われ、内面に同心円の当て具痕が残る。

この他の資料では、包含層出土品として高杯5、把手11を紹介しておく。高杯5は杯底部片であり、脚柱との接合部には棒による刺突痕跡が残る。内外面ともナデ調整が行われるが、外面には刷毛痕跡が僅かに残る。把手11は牛角形のものであり、上面からヘラで貫通する孔を穿っている。体部との接合方法は挿入式である。韓式系土器甌の把手では、形状から見て溝1出土の12・13より古相を示すものである。

【土製品（第10図）】第2調査区溝3から不明土製品14が出土している。3方向で折損したものであるが、長面の3面は削りにより平坦面を形成しており、他の1面は内湾する面を形成している。外面はにぶい黄橙色を呈している。現状では何に復元されるものか不明である。

【埴輪（第10図）】第2調査区溝3から円筒埴輪片15が1点出土している。偏平な突帯を有するもので、貼り付け部に僅かに縦方向の刷毛目が残る。また円形スカシの一部が残存している。橙色を呈している。

【石器（図版4-④）】第1調査区溝1からサヌカイト製の石錐1点が出土している。基部付近で折損しており、現長で4.5cm、重量5.7gを計る。この他に溝1からはサヌカイトの石核1点、細部調整剥片1点、剥片4点が、溝2からは剥片7点が出土している。

また包含層出土品として石鏃が1点出土している。サヌカイト製の凹基のもので、全長1.7cm、幅1.3cm、厚さ0.2cm、重量0.5gを計る小型品である。

【動物遺体（図版4-③）】第1調査区溝1からウマの歯骨が出土している。

IV まとめ

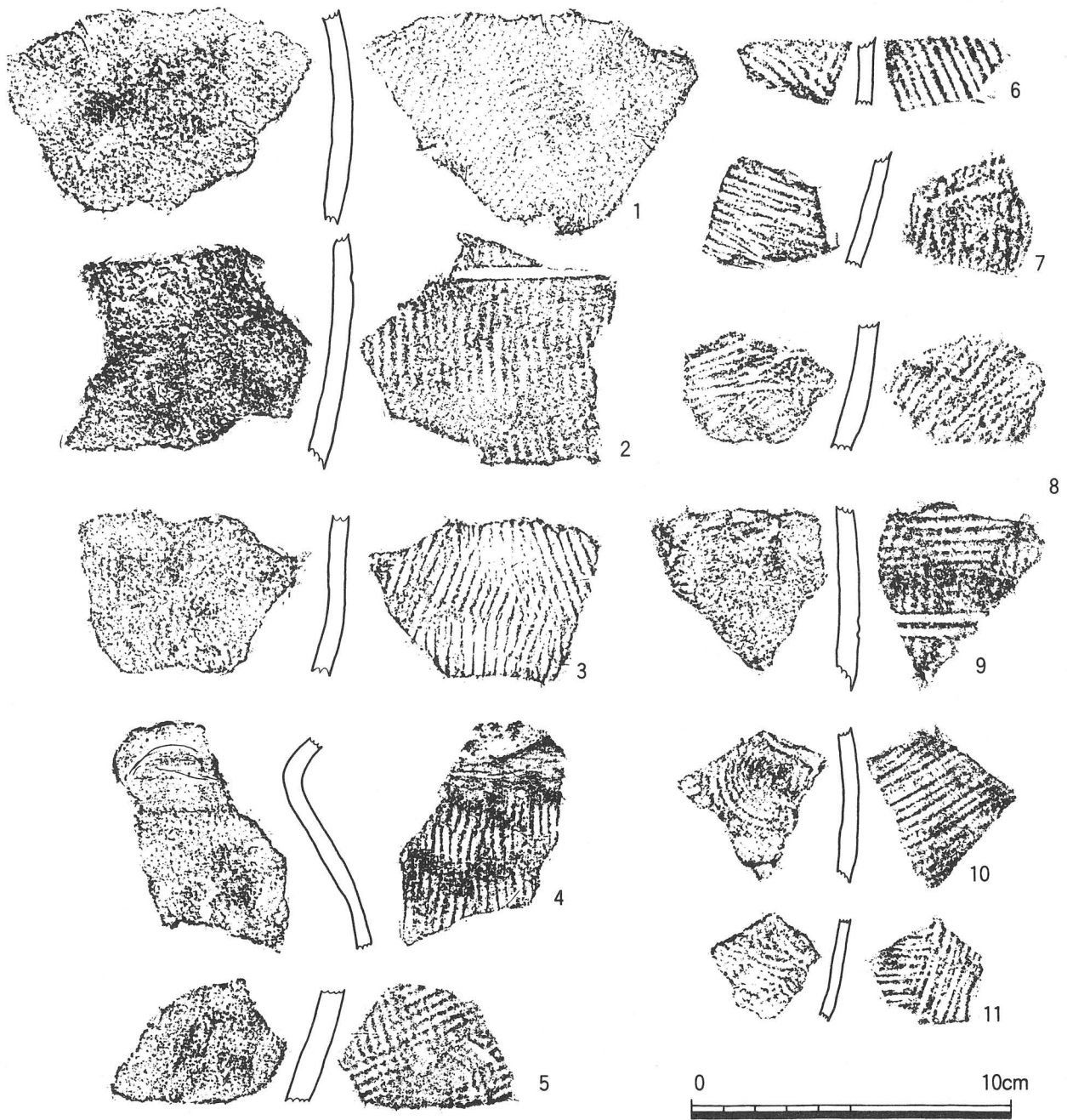
今回の調査では、明確な遺構としては溝遺構の検出のみにとどまったが、古墳時代の土器資料を多量に得ることとなった。ここではまとめに代えて、第7図で想定した3本（溝Ⅰ～Ⅲ）の溝について考察を行う。

【溝Ⅰ】第1調査区溝1の出土遺物はTK216～208型式のものが優勢であり、5世紀中頃に成立した溝であることを示している。また溝1埋没後の掘り直し溝である溝2は、遺構掘削時に溝1の遺物を混入させてしまっている可能性があるものの、TK47～TK10までの資料が主体を占めるため、5世紀末に掘り直され、6世紀前半には埋没したものと考えられる。

【溝Ⅱ】第2調査区溝3からは全体形の復元できる蓋杯類の出土はない。しかしながら、最上段に5帯の波状文を施す器台（図9-19）、細い脚柱部から裾に大きく広がる高杯脚部（図9-13）などは5世紀代でも後半に属するものとは考え難く、溝1とほぼ同時期の成立を考えたい。

【溝Ⅲ】第4調査区溝5・6を同一遺構と誤認し、両遺構の遺物を一括して取り上げてしまったために時期の特定は困難である。ただし、同一の遺構と考えられる第7調査区溝8からは杯蓋で口縁境界部に明確な稜を有し、口縁端部に明確な段を持つ破片が出土しているため、5世紀後半には成立していた可能性が高い。

遺跡の東方佐備丘陵上の板持古墳群との関連では、現在のところ溝1成立期の古墳は確認されていない。溝2成立期の古墳としては、板持2号墳が該当するであろう。しかしながら、小片ではあるが第2調査区溝3から円筒埴輪片の出土が見られるため、今回の調査地周辺に古墳が埋没してい



1～3・5・7・9・11 第1調査区溝1出土
 4・8・10 第1調査区溝2出土
 6 第2調査区溝3出土

第11図 土師質韓式系土器 (S=1/2)

る可能性も視野に入れておくべきであろう。

また、今回の調査では多量の韓式系土器片が出土している。市内では西板持遺跡の東方にある山中田古墳群、別井遺跡からも出土しており、この地域での古墳時代の土器様相を解明する上で重要な資料となるであろう。

出土須恵器観察表

器種	挿図NO	出土遺構・層位	法量 (cm)	特 徴	備 考
杯 蓋	8-1	第1調査区 溝 2	口径 (12.8) 残存高4.1 稜高2.0	天井部外面4/5回転ヘラ削り 他は回転ナデ調整 ロクロ回転 不明	色調 外灰白色N7 内灰白色N8 焼成 良好 胎土 密
杯 蓋	8-2	〃	口径 (14.0) 残存高3.3 稜高2.4	天井部外面4/5回転ヘラ削り 他は回転ナデ調整 ロクロ回転 不明	色調 内外明青灰色5B7/1 焼成 良好 胎土 密
杯 蓋	8-3	〃	口径 (14.6) 残存高3.5 稜高2.2	残存部回転ナデ調整 ロクロ回転 左	色調 外灰色7.5Y6/1 内灰白色5Y8/1 焼成 不良 胎土 密
杯 蓋	8-4	〃	口径 (15.1) 残存高3.2 稜高2.6	残存部回転ナデ調整 ロクロ回転 不明	色調 外灰白色N7 内灰白色N8 焼成 良好 胎土 密
杯 蓋	8-5	〃	口径 (16.5) 残存高3.9 稜高2.35	天井部外面4/5回転ヘラ削り 他は回転ナデ調整 ロクロ回転 左	色調 外灰色N6 内灰色N5 焼成 やや不良 胎土 やや粗
杯 身	8-6	〃	口径 (10.3) 残存高3.9 立上り高1.6	底部外面4/5回転ヘラ削り 他は回転ナデ調整 ヘラ記号有 ロクロ回転 右	色調 内外灰白色N7 焼成 やや不良 胎土 やや粗
杯 身	8-7	〃	口径 (10.6) 残存高5.0 立上り高1.6	底部外面4/5回転ヘラ削り 他は回転ナデ調整 ロクロ回転 不明	色調 内外灰白色N8 焼成 良好 胎土 密
杯 身	8-8	〃	口径 (11.4) 器高5.2 立上り高1.4	底部外面2/3回転ヘラ削り 他は回転ナデ調整 ロクロ回転 右	色調 内外灰白色N8 焼成 良好 胎土 密
杯 身	8-9	〃	口径13.1 器高5.0 立上り高1.7	底部外面4/5回転ヘラ削り 他は回転ナデ調整 ロクロ回転 右	色調 内外灰白色N7 焼成 良好 胎土 密
杯 身	8-10	〃	口径 (13.0) 残存高3.7 立上り高1.6	残存部回転ナデ調整 ロクロ回転 不明	色調 外灰白色N7 内青灰色5PB6/1 焼成 良好 胎土 密
杯 身	8-11	〃	口径 (13.4) 残存高5.0 立上り高1.9	底部外面4/5回転ヘラ削り 他は回転ナデ調整 ロクロ回転 右	色調 内外 灰色N6 焼成 良好 胎土 密
杯 身	8-12	〃	口径 (12.4) 残存高3.7 立上り高1.5	底部外面4/5回転ヘラ削り 他は回転ナデ調整 ロクロ回転 右	色調 外灰色N6 内灰白色N7 焼成 良好 胎土 密
杯 身	8-13	〃	口径 (13.4) 残存高4.4 立上り高1.1	底部外面2/3回転ヘラ削り 他は回転ナデ調整 ロクロ回転 右	色調 外灰色N6 内灰白色N8 焼成 良好 胎土 密

器種	挿図NO	出土遺構・層位	法量 (cm)	特 徴	備 考
杯 身	8-14	第1調査区 溝 2	口径 (13.2) 残存高3.2 立上り高1.3	天井部外面2/3回転ヘラ削り 他は回転ナデ調整 ロクロ回転 不明	色調 外灰白色5Y8/1 内灰白色7.5Y8/1 焼成 良好 胎土 密
杯 蓋	8-15	第1調査区 溝 1	口径 (11.6) 器高4.0 稜高2.5	天井部外面4/5回転ヘラ削り 他は回転ナデ調整 ロクロ回転 右	色調 外灰色N7 内灰白色7.5Y7/1 焼成 良好 胎土 密
杯 蓋	8-16	〃	口径 (11.8) 残存高3.5 稜高2.2	天井部外面4/5回転ヘラ削り 他は回転ナデ調整 ロクロ回転 不明	色調 内外灰色N6 焼成 不良 胎土 密
杯 蓋	8-17	〃	口径12.1 器高4.4 稜高2.1	天井部外面4/5回転ヘラ削り 他は回転ナデ調整 ロクロ回転 左	色調 外灰白色N7 内灰色N6 焼成 良好 胎土密
杯 蓋	8-18	第1調査区溝1 第1調査区溝2	口径 (12.5) 残存高4.65 稜高2.3	天井部外面4/5回転ヘラ削り 他は回転ナデ調整 ロクロ回転 左	色調 外灰白色N7 内灰色N6 焼成 やや不良胎土やや粗
杯 蓋	8-19	第1調査区 溝 1	口径12.4 器高4.3 稜高2.2	天井部外面4/5回転ヘラ削り 他は回転ナデ調整 ロクロ回転 左	色調 外灰白色N7 内灰色N4 焼成 良好 胎土 密
杯 蓋	8-20	〃	口径12.4 器高5.0 稜高2.4	天井部外面4/5回転ヘラ削り 他は回転ナデ調整 ロクロ回転 左	色調 外明青灰色5B7/1 内青灰色5PB6/1 焼成 良好 胎土 密
杯 蓋	8-21	〃	口径 (12.6) 残存高3.6 稜高2.1	天井部外面回転ヘラ削り後カキ 目調整 他は回転ナデ調整 ロクロ回転 左	色調 外灰色N5 内青灰色5B6/1 焼成 良好 胎土 密
杯 蓋	8-22	〃	口径 (13.6) 残存高3.7 稜高2.0	天井部外面9/10回転ヘラ削り 他は回転ナデ調整 ロクロ回転 不明	色調 外青灰色5PB6/1 内灰色N6 焼成 良好 胎土 密
杯 身	8-24	〃	口径 (10.0) 残存高3.3 立上り高1.8	底部外面4/5回転ヘラ削り 他は回転ナデ調整 ロクロ回転 右	色調 外灰色N6 内灰色N5 焼成 良好 胎土 密
杯 身	8-25	〃	口径 (11.1) 器高4.2 立上り高1.8	底部外面4/5回転ヘラ削り 他は回転ナデ調整 ヘラ記号有 ロクロ回転 左	色調 外灰色N6 内紫灰色5P6/1 焼成 良好 胎土 密
杯 身	8-26	〃	口径11.0 器高4.6 立上り高1.4	底部外面4/5回転ヘラ削り 他は回転ナデ調整 ヘラ記号有 ロクロ回転 左	色調 内外 灰色N6 焼成 良好 胎土 密
杯 身	8-27	〃	口径 (14.2) 残存高3.4 立上り高1.9	残存部回転ナデ調整 ロクロ回転 不明	色調 外灰白色N7 内灰白色N8 焼成 良好 胎土 密

器種	挿図N0	出土遺構・層位	法量 (cm)	特徴	備考
杯身	8-28	第1調査区 溝 1	口径 (13.2) 残存高3.1 立上り高1.5	残存部回転ナデ調整 ロクロ回転 不明	色調 内外灰色N8 焼成 良好 胎土 密
無蓋 高杯	9-1	第1調査区 溝 2	口径 (14.6) 残存高6.0 稜高2.0	杯部のみ残存。体部外面に沈線 1条と波状文を施す。波状文上 面はナデで消されている ロクロ回転施文時 左	色調 外灰色N6 内灰白色N8 焼成 良好 胎土 密
無蓋 高杯	9-2	第1調査区 溝 1	口径 (13.8) 残存高3.7 稜高2.0	杯部のみ残存。全面を回転ナデ 調整。口縁端部は丸く収める。	色調 外灰色N5 内灰色N6 焼成 良 胎土 密
無蓋 高杯	9-3	〃	口径 (14.6) 残存高3.9 稜高1.8	杯部のみ残存。天井部外面4/5 回転ヘラ削り。他は回転ナデ調 整。ロクロ回転 左	色調 内外灰白色5Y8/2 焼成 不良 (土師質焼成) 胎土 密
無蓋 高杯	9-4	第1調査区 基本層序 4	口径 (12.5) 残存高4.65 稜高2.3	天井部外面4/5回転ヘラ削り 他は回転ナデ調整 ロクロ回転 左	色調 外灰白色N7 内灰色N6 焼成 やや不良胎土やや粗
有蓋 高杯	9-5	第1調査区溝1 第1調査区溝2	口径 (8.4) 残存高4.5 立上り高1.5	杯部のみ残存。底部外面手持ち ヘラ削り。体部外面に波状文を 廻らせるが、上下を強くヨコナ デしている。	色調 外灰白色N7 内灰色N4 焼成 良好 胎土 密
有蓋 高杯	9-6	第1調査区 溝 1	口径 (11.8) 残存高5.2 立上り高1.0	杯部のみ残存。鐔状の水平受け 部を有する。体部外面には波状 文を廻らせる。施文時ロクロ回 転右。波状文下部に稜を有する	色調 内外灰色N6 焼成 良好 胎土 密
高杯 蓋	9-9	第1調査区 溝 2	口径12.2 器高5.2 稜高2.2	天井部外面4/5回転ヘラ削り。 上部に円形のつまみ (径3.1) を貼り付ける。つまみ中央部は やや隆起する。ロクロ回転 左	色調 内外灰白色N7 焼成 良好 胎土 密
高杯 蓋	9-10	第1調査区 溝 1	口径 (12.8) 器高4.8 稜高2.0	天井部外面4/5回転ヘラ削り。 上部に円形のつまみ (径3.2) を貼り付ける。つまみ中央部は やや隆起する。ロクロ回転 左	色調 外外灰白色N7 焼成 良好 胎土 密
高杯	9-11	〃	脚部径 (9.4) 脚高4.5	杯上部を欠失。脚部に3方向の 長方形スカシを有する。脚端部 は内湾させて収める。	色調 外灰色N7 内明青灰色5B7/1 焼成 良好 胎土 密
高杯	9-12	〃	脚部径 (6.8) 脚高6.8	杯部を欠失。脚部に4方向の長 方形スカシを有する。外面はカ キメ調整が施される。脚端部は ほぼ垂直に下垂させて収める	色調 外灰色N7 内黒色N3 焼成 良好 胎土 密

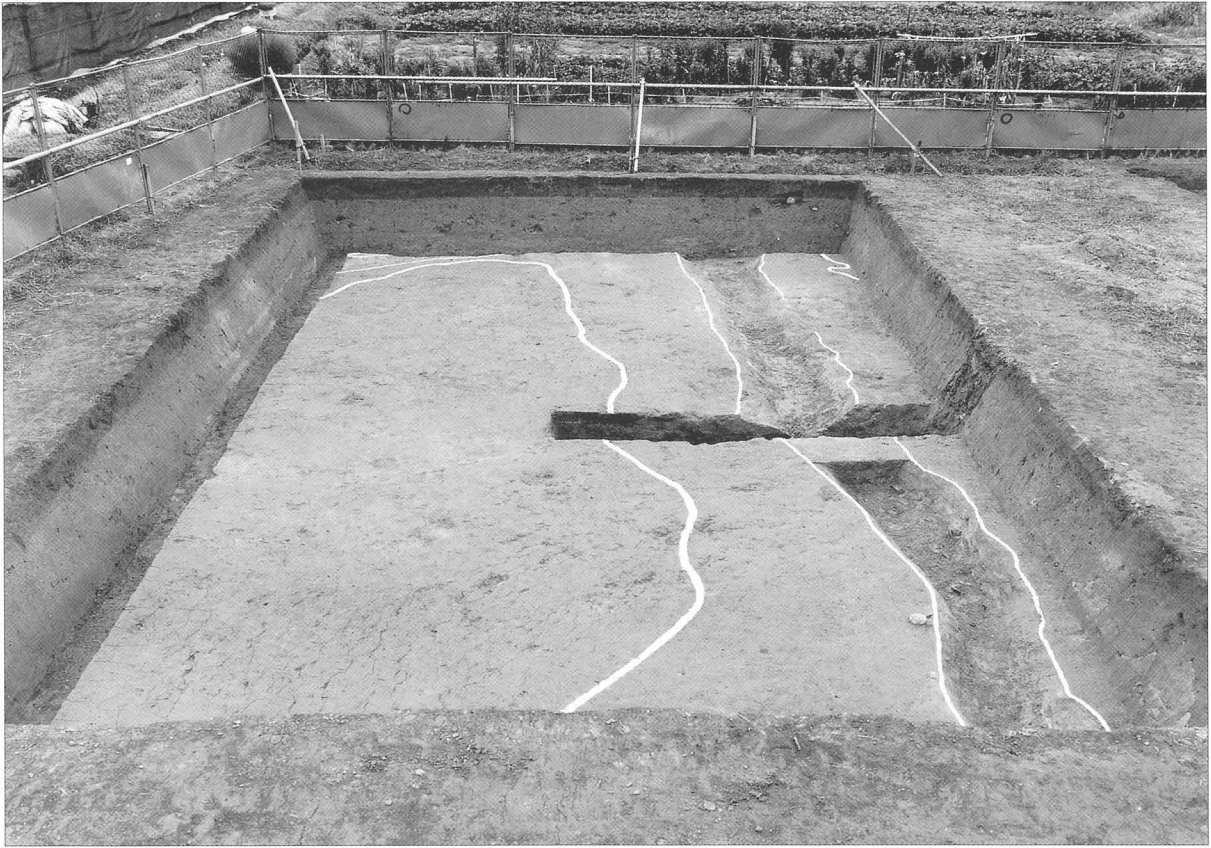
器種	挿図NO	出土遺構・層位	法量 (cm)	特徴	備考
高杯	9-13	第2調査区 溝 1	残存高5.3	杯部上方・脚端部を欠失。脚部には小さい三角形(滴形)のスカシ方向不明。スカシ下部に突線が1条廻る。	色調 内外青灰色5PB6/1 焼成 良好 胎土 密
高杯	9-14	第8調査区 基本層序 4	残存高5.2	杯部上方・脚端部を欠失。脚部には小さい滴形のスカシが4方向に入る。スカシ下部に段を有する	色調 内外灰白色N 7 焼成 良好 胎土 密
小型 短頸壺	9-15	第1調査区 溝 2	口径 (9.2) 残存高3.7 体部径 (13.3)	やや内傾する頸部を有し、口縁端部は丸く収める。全面ナデ調整。	色調 内外灰色N6 焼成 不良 胎土 密
小型 短頸壺	9-16	第1調査区 溝 1	口径 (10.4) 残存高3.7	やや内傾気味に直立する頸部を有し、口縁端部は丸く収めるが、内面に段を有する。体部外面カキメ調整。	色調 内外灰白色N8 焼成 良好 胎土 密
小型 短頸壺	9-17	第1調査区 溝 2	口径 (8.4) 残存高5.4 体部径 (9.0)	短く外反する頸部を有し、口縁端部は面を取る。体部には上半に軽い沈線を2条、過半に1条廻らす。調整はナデ調整。	色調 外灰白色N7 内灰色N6 焼成 良好 胎土 密
小型 短頸壺	9-18	第1調査区 溝 1	口径 (13.2) 器高8.4 体部径 (14.2)	短く外反する頸部を有し、口縁端部はナデによって凹面有する。調整はナデ調整。	色調 外灰白色5Y8/1 内灰白色2.5Y8/1 焼成 良好 胎土 密
器台	9-19	第2調査区 溝 3	残存高9.3	脚部最上段と杯部の底面が僅かに残る。脚部には4方向に長方形スカシを入れる。スカシの上方には突線を2条、下方には現状で2条の突線が廻っている。突線間は波状文を5帯廻らせるが、波形はランダムであり、施文方向は下から上である。施文時ロクロ回転右	色調 外灰色N6 内灰白色N7 焼成 良好 胎土 密
甕	9-20	第1調査区 溝 2	口径ひずむ 残存高7.2	口縁部は焼きひずみにより大きくゆがんでいる。頸部中間に突線を1条廻らせ、その上下に波状文を廻らせる。施文時ロクロ回転右。体部には原体9本の平行叩きが上から下に行われる。	色調 外灰色N6 内灰色N7 焼成 良好 胎土 密

器種	挿図NO	出土遺構・層位	法量 (cm)	特徴	備考
腺	9-20	第8調査区 溝 10	残存高3.5 体部径(9.2) 孔径 (1.6)	口縁部・体部過半を欠失。孔はやや上方に穿たれており、孔位に薄く波状文を廻らせている。	色調 内外灰色N6 焼成 良好 胎土 密
甕	9-22	第1調査区 基本層序 1	口径 (23.2) 残存高9.8 頸部高5.5	強く外傾する頸部であり、口縁端部は上下に拡張させる。頸部には波状文を1帯廻らせる。体外面は平行叩き後カキメ。内面には同心円当て具痕が残る。	色調 内外灰白色N7 焼成 良好 胎土 密
甕	9-23	第1調査区 溝 1	口径 (18.7) 残存高10.3 頸部高6.3	緩やかに外傾する頸部で、口縁下部に突線を1条廻らせる。口縁端部は上下に僅かに拡張させる。体部外面は横方向の平行叩きを行った後に縦方向の平行叩きを行う。内面は同心円当て具痕をナデ消している。	色調 外青灰色5B5/1 外灰色N5 焼成 良好 胎土 密
甕	9-24	第1調査区 溝 1 第2調査区 溝 3	口径 (39.4) 残存高6.3	外傾する頸部の上位と中位に突線をそれぞれ1条・2条廻らし、間に波状文を充填する。口縁端部は上下に拡張させている。内面ナデ調整。	色調 外暗灰色N3 内暗紫灰色5P7/1 焼成 良好 胎土 密
甕	9-25	第1調査区 溝 1	口径 (20.6) 残存高8.0 頸部高5.0	僅かに外反する頸部で、口縁端部は上方に拡張させる。口縁下に突線を1条廻らせる。頸部にはカキメを施す。体部外面は平行叩きが行われているが、部分的に横方向にナデ消している。内面は同心円当て具痕をナデ消している。	色調 内外灰白色2.5Y7/1 焼成 良好 胎土 密
甕	9-26	第1調査区 溝 1	口径 (26.2) 残存高4.9	緩やかに外反する頸部で、口縁端部は上方に拡張させる。頸部外面は上半をカキメ、過半をナデ。内面はナデで調整する。	色調 外灰色N6 内灰白色N7 焼成 良好 胎土 密
壺	9-27	第1調査区 溝 1	口径 (19.6) 残存高7.6 頸部高3.6	頸部は短く外反し、口縁はほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部は水平に面を取っている。口縁・頸部の境界には強調された鏢状突線を廻らせ区分する。体部外面に格子叩き。残りはナデ調整	色調 外灰色5Y5/1 内灰白色N7 焼成 良好 胎土 密

報告書抄録

ふりがな	にしいたもちいせき							
書名	西板持遺跡 I							
副書名	『(仮称) 西板持コミュニティ施設兼老人いこいの家』建設に伴う調査							
巻次								
シリーズ名	富田林市遺跡調査報告							
シリーズ番号								
編著者名	横山 成己							
編集機関	富田林市教育委員会							
所在地	〒584-8511 大阪府富田林市常盤町1番1号 ☎0721-25-1000							
発行年月日	西暦 2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしいたもちいせき 西板持遺跡	とんだばやしし 富田林市 にしいたもちちようめ 西板持3丁目	27214	49	34° 30' 45"	135° 36' 25"	2002.8.19~ 2002.9.6	192	『(仮称) 西板持コミュニティ施設兼老人いこいの家』建設による
所収遺物	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西板持遺跡	集落	古墳時代	溝・土壇・ピット		須恵器・土師器・ 韓式系土器 石器・獣骨		古墳時代中期の集落遺跡の確認	

版 图



第1調査区 溝2全景 東から



溝2遺物出土状況 南から



第1調査区 溝1全景 東から



溝1遺物出土状況 北東から



8-24



8-20



8-25



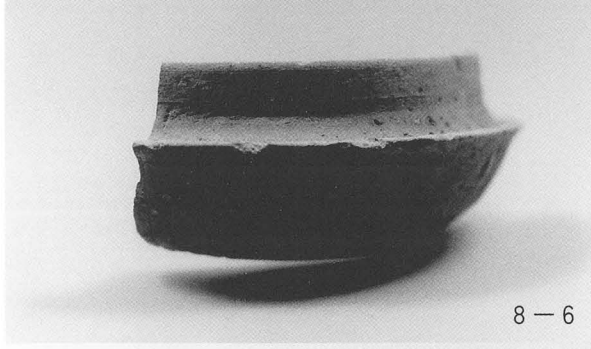
8-18



8-9



8-17



8-6



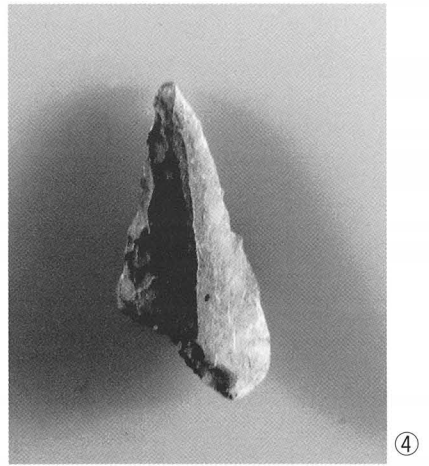
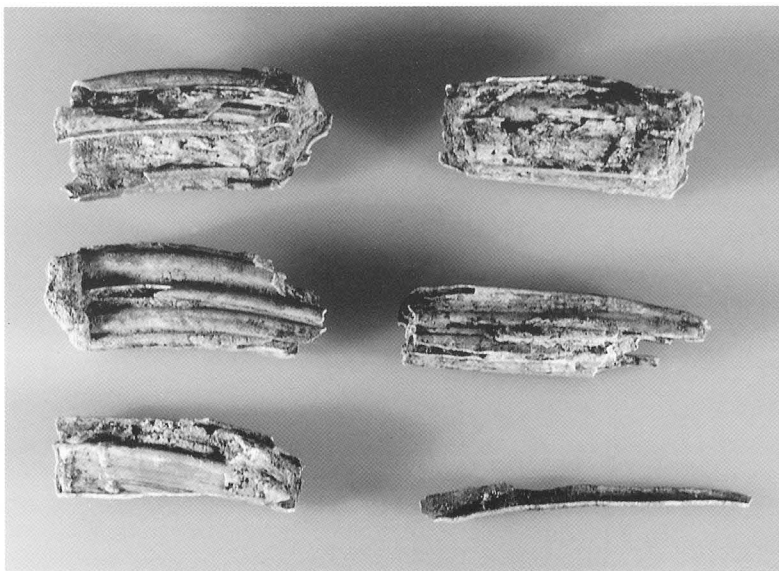
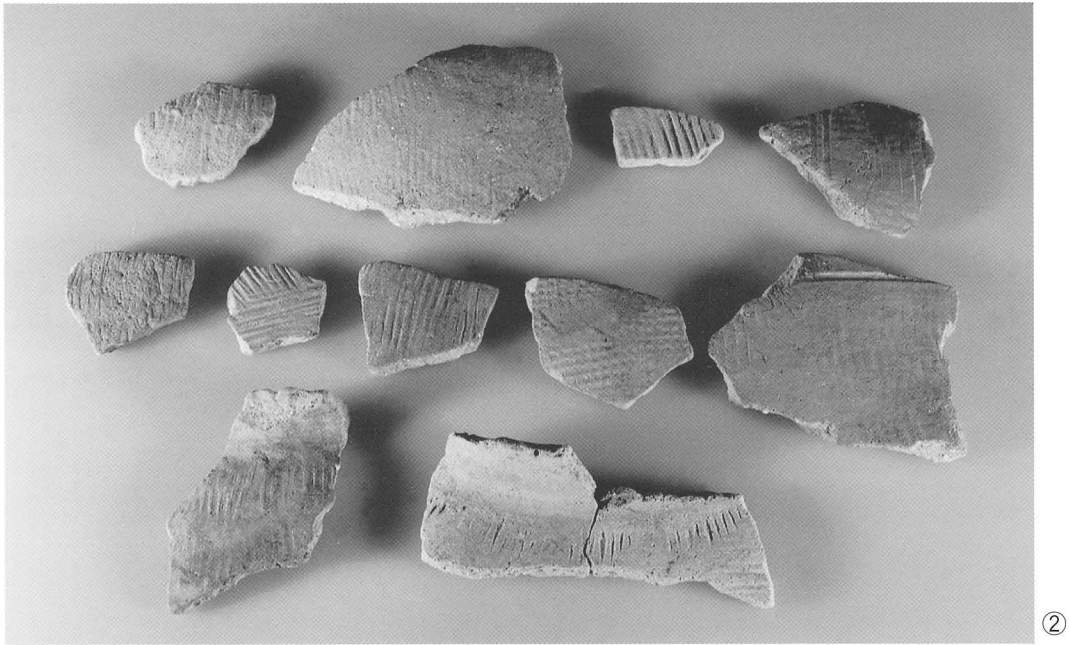
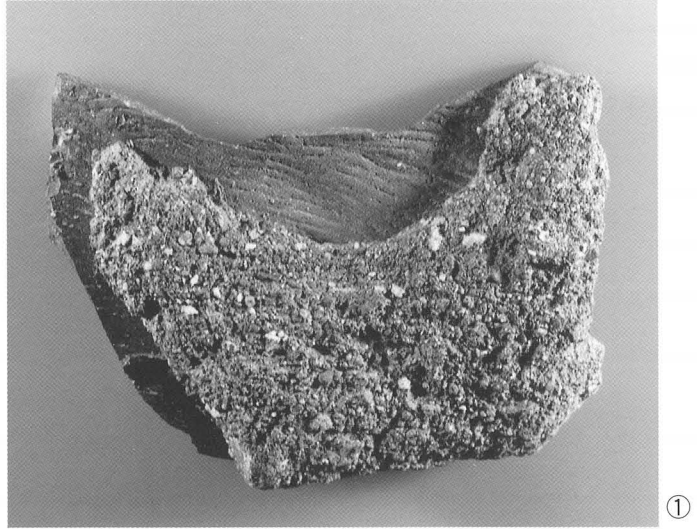
9-9



9-21



9-22



出土遺物

西 板 持 遺 跡 I

発行年月日 2003年3月31日

編集・発行 富田林市遺跡調査会

住 所 富田林市常盤町1番1号

印 刷 橋本印刷株式会社

